

フッサールにおける再生としての想像概念について

伊藤俊介

はじめに

本稿は、フッサールの想像(Phantasie)⁽¹⁾概念がもつ「再生(Reproduktion)」の性格について分析することを目的とする。フッサールにとって、想像、想起のような現にないものを思い浮かべる意識は、知覚の再生の性格をもつ。知覚は原的意識、つまり幅のある現在である内的時間意識によって生き生きと与えられる意識であるという点で、再生的意識に対して絶対的な優位性をもつ。しかし、このような知覚の再生としての想像は結局のところ、現物のコピーを表象している意識にすぎないのでないかという問いが浮かび上がる。この問いに対して、本稿はフッサールの想像概念は再生という性格を保持してもなお、単なる現物のコピーを超えた創造性を保つことが可能であることを示す。

本稿は以下のように論じる。一節では、フッサールが想像を再生の性格をもつと捉えた動機を、彼が『論理学研究』(以下、『論研』)で抱えていた感覚内容とファンタスマの問題の解決から明らかにする。彼は「統握-内容図式」を基礎として想像意識を記述したが、その図式を放棄し、想像は想起をモデルとした知覚の再生であると考えた。二節では、この再生的想像の内実を探る。我々は再生一般の特徴を「意識の二重化」として捉えたうえで、何が想像と想起を区別するかを明らかにする。想像とは単に再生させる意識であるのではなく、「いわば」再生する性格をもつことを意味する。

1. 代理としての想像から再生としての想像へ

まず、フッサールが再生としての想像という着想に至った経緯を辿りたい。彼は初めから想像を再生的意識として捉えていたわけではない。

フッサールは『論研』において、意識が対象を構成する志向的体験は大きく「感覚内容(統握内容)」と「統握(統覚)」⁽²⁾から成り立っていると考える。

我々にとって統覚とは、体験それ自身のうちに、体験の記述的内容のうちに、感覚のなまの現実存在に対して見出される付加物 (Überschuß) である。感覚をいわば生化し (beseelen)、そしてそれ自身の本質に従って、我々にあれこれの对象的なものを知覚させるのは、例えば我々がこの木を見、あのベルの音を聞き、花の香りを嗅ぐなどのことを可能にするのは、作用性格である。(XIX/1 399) ⁽³⁾

フッサールは感覚されるものと知覚されるものを明確に区別する。「感覚内容はいわば、感覚によって表象される [=知覚される ⁽⁴⁾] 対象の内容を作り上げるための、それに類似した建築材料を提供している」(XIX/1 80-81)。我々が何かを見たり、聞いたり、嗅いだりする際、我々は感覚内容に向かっているのではなく、感覚内容という建築材料をもとに知覚される対象を思念している。この感覚内容を、いわば生化し、知覚される対象を思念する役割が統握である。この感覚内容と統握によって対象を構成する図式は一般に「統握－内容図式」と呼ばれる。

次いで、フッサールは「像意識 (Bildbewußtsein)」の志向的体験の分析をする。像意識とは、絵画や写真などの物理的素材 (キャンバスやインク) を介して像を表象する意識のことである。フッサールは上の引用の後に、図式が知覚意識だけでなく像意識にも適用可能なことを認めている。

同様のことが〔知覚以外の〕その他の場合にも明らかに妥当する。例えば、端的な想像や模像 (abbilden) 的想像の作用に属する諸感覚 (あるいはこれらを、統握の土台としての機能を果たす内容と呼んでもよいが) にも当てはまる。像化的 (verbildlich) 統握は、知覚現出の代わりに、むしろ像現出 (Bilderscheinung) を我々に獲得させるのであり、そしてこの像現出の中で、体験された諸感覚に基づいて、像的に表象される対象 (絵に描かれたケンタウルス) が現出するのである。(XIX/1 399)

ここでフッサールは、「像化的統握」と表現するように、像意識を代理物を介した表象として考える。知覚は対象そのものが与えられる「現前 (Präsentation)」意識で

あるのに対して、像意識は「代理として機能する記号もしくは類似性によって代表象 (Repräsentation) する像の助けを借りて」意識される⁽⁵⁾。したがって、知覚と像意識は、統握－内容図式の点から見れば、内容を同じくしながらも、統握の仕方が異なるため、両者の本質的相違を明らかにするのは容易である。次いで、統握－内容図式の下に知覚と想像の区別を図る際、統握の面では現前するものとして統握するか代表象として統握するか、内容の面では感覚内容が与えられるか想像上の感覚内容とされる「ファンタスマ」が与えられるかで区別されるとフッサールは考えた。

『論研』で用いられた統握－内容図式を下地とし、フッサールは詳細な知覚と想像の区別を1904/05年にゲッティンゲンで行われた『空想と像意識』講義（以下『像意識講義』）で試みた。知覚と想像は、「統握に用いられる内容と統握性格自身」のどちらの側面でも互いに区別される (XXIII 10)⁽⁶⁾。伊集院が言うように、フッサールは『像意識講義』で「知覚と想像との本質的相違は素材 (感覚/ファンタスマ) の側にあるのか、それとも統握の仕方の違いなのかという問い」を明らかにしようとした⁽⁷⁾。

この問いを解決すべくフッサールが取った方法は、想像作用を可能な限り「像性表象」として解釈するということ (XXIII 16, note.)、すなわち想像 (Phantasie) と像意識を広義の想像 (Imagination) とみなし、想像と像意識の共通点を見つけることである。知覚と像意識が明確に区別されているいま、想像と像意識の共通点を見つけることができれば知覚と想像の本質的区別を説明することができると思った。

しかし、講義を進めるにつれ、想像と像意識はむしろ異なる作用であることが明らかとなる。というのも、想像には像意識のような物理的な内容が存在しないからだ。想像にあるのはただ物理的な感覚内容に類比する想像内容、つまりファンタスマのみである。したがって、これまでの統握－内容図式の適用を維持し、知覚と想像の区別を可能にするためには、想像対象がなぜ感覚内容を介さずファンタスマによって表象されるのかという感覚内容とファンタスマの区別を説明する必要に迫られることとなった⁽⁸⁾。この時、現在与えられているファンタスマが知覚とは別の対象を統握するとはいかなることかが問われる⁽⁹⁾。この問いに関してフッサールは結局のところ、感覚とファンタスマは持続や強度の差というおよそ本質的区別とは程遠い結論に達することとなる⁽¹⁰⁾。このような事態からフッサールのファンタスマ概念は従来、「経

験主義的な素朴实在論に見なされる怖れのある薄弱なもの」⁽¹¹⁾、「経験主義の遺産」⁽¹²⁾という烙印を押されてきた。

では、このファンタスマの問題をフッサールはいかにして解決したのだろうか。ここで我々は当時のフッサールの時間意識分析の深化に着目しなければならない⁽¹³⁾。フッサールは『論研』の時期から、統握－内容図式における感覚内容の問題に再三直面していた。それ自体は客観化以前のものである感覚内容を客観化の説明に用いられる統握－内容図式で捉えることは容易に無限後退を引き起こす。それゆえ、フッサールは感覚を体験の時間位相の問いとして時間意識分析をすることにより解決を試みた。そして、フッサールはそれ自身他のものによって構成されることのないあらゆる構成の根源である「絶対的意識」を発見する。絶対的意識とは過去把持－原印象－未来予持からなる幅のある現在を基礎とした内的時間意識である。いまや図式における感覚内容とは内的時間意識によってすでに構成されたものに過ぎず、1909年の草稿においてフッサールは「『意識』は全くもって意識から成り立っており、ファンタスマと同様すでに感覚は『意識』である」と主張するに至った（XXIII 265）。

以上のことから、フッサールは感覚とファンタスマは既に内的意識によって構成されたものであることを自覚し、内的時間意識による作用の遂行様態として、知覚と想像の本質的区別を明らかにする必要性に迫られた。そこで、フッサールは想起作用をモデルとした再生ないし準現在化（Vergegenwärtigung）⁽¹⁴⁾という様態として想像作用を考えることとなる。

2. 想像における再生といわばの性格

前節では、想像が時間意識と関連することが示唆されたが、以下では再生の問題を想起の方から明らかにする。なぜなら、フッサールは再生の問題をまず想起の方から着手したからである。そこで明らかになる再生の特徴とは、再生は対象の二重化ではなく、「意識の二重化」を示しているということである。

稲垣とベルネは再生としての想起とは対象における二重化ではなく、「意識（ないし自我）の二重化」を特徴するという⁽¹⁵⁾。この意識の二重化は後年のフッサールの思

想にまで続く再生の特徴である。例として、1923/24年の『第一哲学』講義における「昨日の城の丘の散歩」の例を取り上げたい。ここでの想起は単に昨日の散歩で見た対象物（城、丘から見た情景など）を「現在のな現実存在（gegenwärtiges Dasein）として」見ている意識を意味しない（VIII 84）⁽¹⁶⁾。内的時間意識によっていかにして知覚とは別の仕方で意識されているのかを明らかにしなければ、前節でのファンタスマの問題と同様、対象物を見ただけでなぜ想起意識とされるのかという経験主義的な問題に陥ることとなる。フッサールによれば、想起は「二重の仕方で」生じているという（VIII 85）。

一方で、[...] 反省的に知覚される「私は想起する（Ich erinnere mich）」ということが私の今の体験としてとどまっている。他方で、この今の体験において私の過ぎ去った城の丘の散歩が準現在化されている。（*ibid.*）

そして、このことから以下のように言う。

私の「私は想起する」〔という意識〕の中に「私は知覚した（Ich habe wahrgenommen）」〔という意識〕が共に含まれてある。（*ibid.*）

ここで重要なのは、過去の散歩の時に現れた対象だけでなく、過去の散歩の時の「私の過ぎ去った超越論的生」そのものが意識されていることである（*ibid.*）。

そして、この意識の二重化としての想起は1911年あるいは1912年初めの草稿でも確認される。

想起は知覚の再生的変様であるが、注目すべき固有性をもつ。その固有性とは、想起は知覚（Wahrnehmung）の準現在化でもあり、知覚されるもの（Wahrgenommenen）の準現在化だけではないということだ。私は昼食を想起する。しかし、この昼食の想起において昼食の知覚の想起も「ある（liegen）」。（XXIII 304-305）

我々はパンや肉といった昼食という対象、すなわち「知覚されるもの」だけでなく、それを知覚していたかつての私の意識も想起しているのである。

ここで浮かぶ問いは、意識が二重化した場合、なぜその二つの意識がどちらも同一な私の意識であるのかということである。想起の場合では、意識が二重になったとしても、「私は想起する」と「私は知覚した」の「私」は同一の私であることは理解しやすい。私が過去の体験を想起するということは、「私が今に至るまでの連続的で超越論的な私の過去を観取する」ことを意味する (VIII 85)。つまり、内的時間意識によって過去に体験された意識は、その体験が流れ去ったとしても、過去把持を通じて私の意識に沈殿しているのである。想起における二重の意識の同一化とは、現在における私と過去における私の時間的連関によって結びついていることを示す。

しかし、想像において意識の二重化を考えてみた時、想起のような時間的連関は存在しない。想像における意識の二重化とは、現在私が想像している時の意識と、その意識において私が何かを想像上で体験している時の意識を指す。この二つの意識が時間的に連関しないいま、何によって連関しているのか。

この問いの解決の前に、想起にも想像にも言える再生一般の特徴を改めて確認してみたい。再生一般は知覚経験がもつ身体性の再生であるがゆえに、二重化した意識の同一性をもつことができると主張できる。想起は「私の過ぎ去った超越論的生」を再生させる意識であった。その過ぎ去った超越論的生とは、その生自身が現在いる私のように過去の私が私の足を用いて散歩をしたり、過去の私が目で見ることによってパンや肉を知覚したことを再生させる意識であることも含んでいる。そして、想像上でのあらゆる体験も、「私の身体が」再生的に何かを意識している体験であるだろう。例えば、「私が「白雪姫がりんごを知覚する」ことを想像する」場合について考えてみたい。一つは、想像世界において私が、白雪姫がりんごを見ているシーンを白雪姫とは別の視点から見ている場合が挙げられ、もう一つは、想像世界において私が、白雪姫の視点から「私がりんごを知覚する」と考える場合が挙げられる。この二つの場合のいずれにせよ、現実世界における私の身体性を想像世界で再生している。後者の場合について、その意識の主体は白雪姫であり、現在想像している現実世界にいる私

の意識とは同一的でないと言えるかもしれない。けれども、やはり想像世界における白雪姫の視点になってりんごを知覚しても、りんごは現実にいる私が感覚可能な形で意識されているのである⁽¹⁷⁾。したがって、想像が再生的であるというのは、想像が我々の身体を用いた可能的遂行様態であることを意味する。我々がどれだけ任意に想像をしたとしてもこのことは免れ得ない。丸い四角が存在している空想世界を考えることができたとしても、だからといって我々が丸い四角を感覚可能になるわけではない。

では、再生一般の特徴を知覚経験における身体性の再生としたうえで、想像と想起はいかにして区別されるのか。フッサールは1909年の草稿において、想像とは「いわば (gleichsam)」再生的な意識であると言う。

我々はさしあたり知覚を印象的 (originär) 現前意識、それ自身ここ〔にあるという〕意識 [Selbstda-Bewußtsein] 等々として持ち、想像を「再生的に変様された現前意識」として持ち、いわばそれ自身ここ〔にあり〕 (Selbstda)、いわば現前的なものであり、現前的な想像であるという意識をもつのである。(XXIII 265-266)

そして、『イデーニ I』(1913年)においてフッサールは想像を定立性格との関係から以下のように言う。

現実的な体験の現前にはどれもみな、理念的には、ある中立性変様が対応している。つまり、その体験の現前に内容的に正確に対応したある可能的な想像上の体験の現前が対応しているのである。このような想像上の体験はどれもみな、現実的に現在しつつ存在するものではなく、「いわば」現在的に存在しているかのようなものとして、性格づけられる。(III/1 255)⁽¹⁸⁾

知覚は現実的に対象が存在するという信念性格をもっているため定立的作用であるのに対して、想像は『『本当に現実には』そこに成り立っていることとしては意識されない』中立的作用であるという。このような定立的性格を中立化させることをフッサー

ルは「中立性変様」と言う。そしてそのような変様を被った想像は、「現実的な体験の現前」に対応する。ここでの現実的な体験の現前には知覚だけでなく想起も含まれる。想起は過去の現実的出来事を対象としているため定立的性格をもつ。したがって、再生の変様は想起と想像を共に含むが、中立性変様は想像にのみ適用される。想像とは『『定立的な』準現在化の中立性変様』、したがって「想起の中立性変様」である(III/1 250)。このような知覚や想起に対立した想像は「可能的な想像上の体験の現前」であり、『『いわば』現在の存在しているかのような』性格をもつ。「いわば」とは「可能的な想像上の体験」に用いられるのである。つまり、想像のいわば再生という性格は、知覚経験における身体的な知覚体験を可能的な体験上で再生する働きであることがわかる。

おわりに

以上により再生としての想像という観点を通じて、フッサールにおける想像概念の内実を明らかにした。再生一般は我々の身体が感覚可能な枠内での経験を再生させることであった。再生の中でも、想起は現実起きた経験の再生である以上、定立的な準現在化である。それに対し、想像はいわばという形で純粋に可能性として私の身体が感覚可能な経験を再生させる意識、すなわち中立的な準現在化であると言える。

このような想像における再生はもはや単なる現物のコピーではない。むしろ可能的経験としてこれまで知覚してこなかった経験を再生することができるのである。したがって、ゲニウサスの言うように、フッサールの想像概念が「ノエシス的意味において再生的である」ことは、「想像がノエマ的に産出的 (productive) であるかもしれないという可能性を除外するものではない」⁽¹⁹⁾。可能的経験を再生できる「自由な想像」は、任意性という点で「知覚に対する優位な位置」をもち (III/1 147)、我々の経験の幅を拓げることのできる創造性をもちうるのである。

註

- (1) ここでの想像とは一般に心の中で何かを思い浮かぶ作用を指す。この作用は想像 (Imagination) ではなく空想 (Phantasie) と呼ばれる場合もあるが、本稿では基本的に想像 (Phantasie) と表記する。Imagination は Phantasie と同義ではなく、想起も含むより広い概念であるため、以下では Imagination を「広義の想像」と呼ぶ。
- (2) フッサールにとって統握 (Auffassung) と統覚 (Apperzeption) は同義語である (Husserl, Edmund, ed. Ursula Panzer, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band - I. Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Husserliana, Band XIX/1, 1984, pp. 399-400. (邦訳:『論理学研究 2』(立松弘孝・松井良和・赤松宏訳) みすず書房、1970 年。『論理学研究 3』(立松弘孝・松井良和訳) みすず書房、1974 年)
- (3) フッサール全集 (Husserliana) からの引用は巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で記す。本稿では初出の時のみ参考文献を挙げる。
- (4) ここで「表象される [=知覚される]」としたことに補足を加えておきたい。フッサールは知覚、想起、想像等の志向的体験を「客観化作用」とし、「志向的体験はすべて客観化作用であるか、もしくはそのような作用を『基礎』にもつ」と言う (XIX/1 514)。その上で、フッサールは表象概念の定義の一つに「客観化作用としての表象」を定めた (XIX/1 521)。本文引用部では、表象=客観化作用のうち知覚の場合を例としており「表象される [=知覚される]」と記した。
- (5) ルドルフ・ベルネ「フロイトの無意識概念の基礎づけとしてのフッサールの想像意識概念」(和田渡訳)『思想』2000 年、916 号、185 頁。Husserl, Edmund, ed. Ursula Panzer, *Logische Untersuchungen. Zweiter Band - II. Teil Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Husserliana, Band XIX/2, 1984, pp. 609-610. (邦訳:『論理学研究 4』(立松弘孝訳) みすず書房、1976 年、98 頁)
- (6) Husserl, Edmund, ed. Eduard Marbach, *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung Zur Phänomenologie der anschaulichen Vergegenwärtigungen*, Husserliana, Band XXIII, 1980.
- (7) 伊集院令子『像と平面構成 I ——フッサール像意識分析の未開の新地』晃洋書房、2001 年、108 頁。
- (8) 像意識研究がもたらしたフッサール想像概念への影響は大きい。さしあたり、本稿では像意識研究がもたらした感覚内容とファンタスマの区別の問題を明示できれば十分である。『像意識講義』のより詳細な研究については、ベルネ (2000)、伊集院 (2001)、稲垣論「フッサール想像の現象学と衝動の問題」『東洋大学大学院紀要』2002 年、38 集、1-18 頁が詳しい。
- (9) Cf. ベルネ (2000) 187 頁。
- (10) 稲垣 (2002) 2-3 頁。ベルネ (2000) 187 頁。

- (11) 稲垣 (2002) 4 頁。
- (12) Jansen, Julia, “On the development of Husserl's transcendental phenomenology of imagination and its use for interdisciplinary research,” *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, vol. 4, 2005, p. 122.
- (13) 当時の時間意識研究に関する草稿は主にフッサール全集X巻テキストBに所収されている。時間意識分析についての研究は数多く存在するが、邦文文献として、武藤伸司『力動性としての時間意識』知泉書館、2018年、13-81頁が特に詳しい。
- (14) フッサールは「再生」と「準現在化」を同じ意味の術語として用いている (cf. XXIII 305)。
- (15) Cf. 稲垣 (2002) 5 頁、ベルネ (2000) 189 頁。また、以下も参照。稲垣論『衝動の現象学 フッサール現象学における衝動および感情の位置づけ』知泉書館、2007年、112-113頁。
- (16) Husserl, Edmund, ed. Rudolf Boehm, *Erste Philosophie I (1923-24) : Kritische Ideengeschichte*, Husserliana, Band VIII, 1959.
- (17) 当然、この問題は他者意識の問題にも通ずる。私が純粋な他者の視点に立つことはできず、仮に立ったとしてもそのような視点はもはや他者の視点とは言えない。フッサールにとって他者意識を可能にする「感情移入」作用は、想像や想起のように準現在化作用とされる。この感情移入作用も同様に再生という性格をもつのかは議論の余地があるが別稿に預けることとする。
- (18) Husserl, Edmund, ed. Karl Schuhmann, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie: Ergänzende Texte (1912-1929)*, Husserliana, Band III/1, 1976. (邦訳：『イデー I - II 純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想 第1巻 純粋現象学への全般的序論』(渡辺二郎訳) みすず書房、1987年)
- (19) Geniusas, Saulius, “What Is Productive Imagination? The Hidden Resources of Husserl's Phenomenology of Phantasy,” Iulian Apostolescu ed., *The Subject(s) of Phenomenology: Rereading Husserl*, Cham, Springer, 2020, p. 140.